

[書 評]

キャサリン・A・クラフト著,
里中哲彦編訳
『日本人の9割が知らない
英語の常識181』

(筑摩書房, 2018年)

軽 部 恵 子

キャサリン・A・クラフトの『日本人の9割が知らない英語の常識181』は、『日本人の9割が間違える英語表現100』の続編である。評者は以前『英語表現100』を書評に取り上げた(『社会学論集』第51巻第1号(2017年) pp. 175-181に掲載)こともあり、本書を楽しみに手に取った。

本書は、日本人が中学高校で学んだ範囲で理解できる英語について、日本人が間違えやすい言い回しを懇切丁寧に解説している。2018年3月10日に第1刷が発行されて、1ヶ月足らずの4月5日に第2刷が発行されたことから、前作同様、英語を学ぶ人、英語を仕事で毎日使う人の間で、好評を博したのであろう。

著者は、アメリカのミシガン州で生まれ、オハイオ州に育ち、ボーリング・グリーン州立大学を卒業した。南山大学の交換留学生として来日したが、日本で英語月刊誌『ET PEOPLE!』の発行、通訳、翻訳家、河合塾での講師を務めてきた。著書の中に『その英語、ちょっとカタすぎま

す！：日本人が知らないネイティブの英語表現』（ディーエイチシー、2017年）があることから、著者の主要な関心は、外国人がネイティブ・スピーカーに近い、より自然な英語表現を獲得することに置かれているようである。

本書の構成は、「はじめに」、第1章「日本語と英語の発想の違い」、第2章「文法の誤解」、第3章「語法の勘違い」、第4章「マナーの非常識」、第5章「カタカナ語の不思議」、「あとがき」で構成される。

第1章「日本語と英語の発想の違い」には、2つの言語の発想の違いから間違える例が並べられている。たとえば、「001 ここはどこですか？」は、“Where is here?”ではなく、「私」が主語となり、“Where am I (now)?”と言う（p. 22）。「009 注文したコートを受け取りに来ました。」は、“I came here to pick up the coat I ordered.”と過去形で言うのではなく、“I’m here to pick up the coat I ordered.”と、「私」の到着を「ここにいる」と現在形で言う（p. 30）。このように、主語や時制を見るだけでも、日本語と英語の発想は大きく異なるとわかる。

「013 辞めさせてもらいます」を日本人がつい“Please let me quit.”と訳してしまうのは、仕事を辞めるのに上司の許可が必要と何となく思っている、あるいはそう言った方が丁寧との意識を持っているからか。個人主義の文化では、あるいは雇用が使用者と労働者間の契約という概念が確立している文化では、主語が一人称単数となり、“I’m quitting.”と端的に言う（p. 34）。現在進行形を用いるのは、辞職のプロセスがまさに進行中だからであろう。

第2章「文法の誤解」を読むと、中学・高校で習った英文法の知識を時にリセットする必要に迫られる。「045 彼には友だちがほとんどいない。」を、日本人は得てして“He has few friends.”と言うが、英語圏の人は“He has only a few friends.”あるいは否定形で“He doesn’t have many

キャサリン・A・クラフト著，里中哲彦編訳『日本人の9割が知らない……

friends.”と言う (p. 68)。評者も，中学・高校の英語の授業で，“There is a little milk in the glass.”（コップにミルクが少しある）と“*There is little milk in the glass.*”（コップにミルクが少ししかない）の違いを習った。だが，著者によると，名詞の前に不定冠詞の a が付いているかどうかは，英語のネイティブ・スピーカーにとっても聞き取りにくいので，“only a few friends”または“not many friends”と言った方が，聞き違いによる誤解がない (p. 68)。そういえば，日本語でも「私立」を「市立」と勘違いされないよう「わたくしりつ」と言い換えることがあるし，地方自治体の「首長（しゅちょう）」を「くびちょう」と、「（法律の）施行（しこう）」を「試行」と誤解されないよう「せこう」と読むことがある。

「046 彼女は退屈していた。」は，boring ではなく bored となるが，これは大学入試に出題される文法問題である (p. 69)。「退屈していた」なので過去進行形だと思い，“She was boring.”とする人が少なからずいるそうだが，これでは彼女自身が「退屈な人物」になってしまい，とくにビジネスの場面では大変なことになる。現在分詞と過去分詞の違いはきっちり押さえておきたい。なお，過去進行形を使えば“*She was being bored.*”となるが，実際の会話ではあまり言わないのではないか。

第3章「語法の勘違い」にも文法が大いに関係してくる。たとえば，「088 ありがとうございます。大変感謝しています。」を“*I really appreciate.*”で終わるのは誤りで，他動詞の appreciate には必ず目的語（この場合は it）が必要となる (p. 113)。動詞には，自動詞と他動詞の双方の機能を持つ場合もあるので，会話の中で使いこなすには，例文をまるごと覚えるのが一番安全である。勉強法に関するオンライン誌の論考に「暗記は悪だ」との議論がよく見られるが，「時には暗記も必要かつ有益」が評者の持論である。

第4章「マナーの非常識」には，日本人がしがちなマナー違反の例が載っている。たとえば，ファースト・ネームに Mr. は付けないし，初対

面の人をいきなりファースト・ネームでは呼ばない (p. 161)。著者は取り上げなかったが、アメリカでは就職活動で提出する履歴書に性別や未婚・既婚を書かせず、女性には Ms. (ミズ) の敬称を使う。その点、日本の「さん付け」は相手の婚姻状況や性別を考える必要がなく、適度な親しみやすさと丁寧さが兼ね備わっていて、便利な呼び方である、と評者はアメリカ人に聞いたことがある。

クリスマス・カードも気をつけなければならない。相手がキリスト教徒とは限らないので、“Merry Christmas!”と書くより、“Happy holidays!”の方が無難である (p. 181)。同じキリスト教でも、正教会のクリスマスはユリウス暦に基づく。さらに言えば、グリーティング・カードの文言に Merry Christmas がなくても、絵柄のどこかにどんなに小さくてもサンタ・クロースやクリスマス・リースが描かれていれば、使うのを辞めた方が無難である。評者の経験では、そういう絵柄のカードは和風デザインにも時々ある。結局、相手の宗教や政治的信条をよく知らない場合には、純粋な和風にした方が安全で、かつ相手にも喜ばれるであろう。

第5章「カタカナ語の不思議」は、日本人が英語を日本式に取り入れたことから生まれた問題である。同時に、英語圏の人が日本語を学ぶ際に苦労する点でもある。著者が紹介するものには新語も含まれる。インターネットや SNS が日々進化するため、「ラインする」や「ググる」などの英語が日々生まれてくるが、英語では LINE が動詞として使われる (p. 184)。「メイク」は日本語で化粧の意でよく使われるが、英語では makeup と言わなければ意味が通じない (p. 187)。ちなみに、国語辞典類には「メイク」で出てくるが、本書があえて「メイク」と二重母音で記載したのは、著者がネイティブ・スピーカーであることに編訳者の里中哲彦が配慮するか。なお、英語の辞書には makeup のみならず、make-up の綴りもある。

著者は取り上げなかったが、他によく見られる「不思議なカタカナ語」

キャサリン・A・クラフト著，里中哲彦編訳『日本人の9割が知らない……

には，ショートケーキ（shortcake。アメリカでは，ショートニングを入れた生地と果物で作るケーキ。英国では，厚いショートブレッドの一種），ジェットコースター（roller coaster）などがある。和製英語を英語と取り違えないためには，辞書をこまめに引くしかない。

「あとがき ネイティブと話そう！」には，読者が気軽に質問できるよう，質問があると話しかける時，単語や熟語の意味を尋ねたい時，発音のしかたを尋ねたい時など，場面に応じた言い方を列記しており，役に立つ。日本の学校の授業では質問があまりされないから，この種の表現を学ぶ機会が少ないのであろう。

このように，本書は電車の待ち時間，授業の休み時間など，短時間でも気軽に手に取り読むことで，日本人がよくする英語の間違いを学ぶ構成になっている。現在，新型コロナウイルス感染症の影響で，評者を含めた多くの大学教員は毎日慣れないポータルサイト用の教材作りに苦心している。対面授業なら，学生の集中力を維持するために，役に立つ余談を入れて気分転換を図るところだが，そういう時，本書に出てくる事例をオンライン授業での余談やトリビアに使ってもよいのではないか。あるいは，PDF教材の分量を増やすのにもよい。英語の授業に限らず，比較文化，異文化コミュニケーション，ひいては国際政治，国際経済，国際経営の授業にも取り入れることができる。とくに，先述のファースト・ネームの件や，“I am quitting.”の言い回しは，多国籍・多文化の環境で仕事をする人なら，誰もが知っておくべき事柄であろう。

一方，評者の本書に対して1つだけ指摘をしたい。著者は今回181の英語の常識を取り上げた。前回は全部で100の英語表現を取り上げたため，1項目につき見開き2頁を説明に使えたが，今回は1項目1頁となったため，各項目の説明が非常に短い。説明が簡潔だと読みやすくなる反面，初学者が誤解する箇所もあると思われる。たとえば，「110 旅行はどうだっ

たの？」で、著者は「travel（旅行する）は動詞で使い、trip（旅行）は名詞で使うというのが、ネイティブの『常識』（p.135）と説明する。しかし、旅行会社にあたる英語は travel agency であるし、旅行用目覚まし時計は travel alarm となる。この頁の説明だけを読んだ中高生や忙しいビジネスパーソンには、「travel=動詞」が印象づけられ、別の誤用が発生するおそれがあるのではないかと推察するが、むしろ2冊に分けた方がよかったと評者は思う。

1つの言語を完璧に使いこなすことは、ネイティブ・スピーカーであっても難しい。たとえば、日本で生まれ育ち、日本で大学教育を終えた日本人が、漢字や慣用句の使い方を間違えていることはよくある。また、地方によって意味合いが違う語句であると知らずに使っていることもある。ましてや、「読む・聞く・話す・書く」の4つの作業の中で、「書く」は最も困難であり、物事を論理立てて叙述するには、アカデミック・ライティングの訓練が欠かせない。あるいは、たった5-6行のお知らせであっても、書き手の教養、性格、好みまでもが如実に現れる。それだけ、「書く」ということは難しい。

外国語を使うとき、人間が自分の母語あるいは第一言語とそれに伴う文化に影響を受けるのは当然である。日本で30年以上英語を教えてきた著者が、著述家・翻訳家の里中哲彦に本書を含む複数の著作の和訳と編集を依頼してきたのは、読みやすさにくわえて、おそらく日本語の細かいニュアンスで正確を期すためであろう。

評者の結論としては、本書を手取る英語学習者が現在どのようなレベルにあっても、間違いを恐れず、だが、間違えたことは忘れず、今日の自分より明日の自分が進歩していればよいと考える。